森の生きものガイド

2019. 2. 22 （第22号）
びわこ地球市民の森
守山市水保町2727

四季折々の森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

1．常緑樹と落葉樹

里の森ゾーンのエノキの大木から陸橋を渡りふれあいゾーンに入ると、園路両側にこの時期対照的な林が左右に見られます。

右の写真のように、左側には緑色の葉っぱが残る常緑樹林、右側には葉っぱを落とした落葉樹林の森が広がっています。

常緑樹林では、アラカシ、シラカシ、ツブラジイ、スダジイ、タブノキ、ヤマモモなどの樹木が、落葉樹林では、クヌギ、コナラ、エノキ、ムクノキ、ナラガシワ、アベマキなどの樹木が生育しています。

冬でも葉が茂り薄暗い常緑樹林と、紅葉し葉が落ちて明るい落葉樹林を、園路を散策しながら観察できます。

特に落葉樹林は葉っぱが落ちているので、森に入ると樹冠や枝の広がりなどの様子をよく観ることができ、また樹皮や、厳しい寒さに耐えながらも春を待つ冬芽の生命力の強さも観察することができます。

樹冠・枝の広がりの様子

常緑樹林（左側）と落葉樹林（右側）

常緑樹の林内

落葉樹の林内

2．クヌギ（ブナ科）

ブナ科の落葉高木で、語源は国木(クニキ：国を代表する木)、または食之木（クノキ）(ドングリが食用)からきたといわれています。樹高は15～20mにもなり、樹皮は暗い灰褐色で厚いコルク状となり縦に割れ目ができます。葉は互生、長楕円形で周囲には鋭い鋸葉が並び、薄いが硬く表面には艶があり、新緑や紅葉の時期は美しい。紅葉後に完全な枯葉になっても離層が形成されないため、枝からなかなか落ちず２月頃まで枝についていることがあります。

花は、雌雄別の風媒花で、４～５月頃に咲き、雄花は黄色い10cmほどの房状の小さな花をつけます。実(み)はドングリと呼ばれ、直径が約2cmと大きくほぼ球形です。

幹の一部から樹液がしみ出て、カブトムシやクワガタなどの昆虫が集まります。

生長が早く１０年ほどで材として利用でき、伐採しても切り株から萌芽更新して数年後に樹勢が回復します。

シイタケの原木として広く利用されています。

この時期、枝の先には光沢のない冬芽を付け軟毛が生えているのが見られます。

←紅葉後も葉がついている
ふれあいゾーンのクヌギ林
（樹高15m程度に生長）

冬芽

樹皮

3．コナラ（ブナ科）

ブナ科の落葉広葉樹で別名「ホウソ」と言われ、雑木林(ぞうきばやし）に多く見られます。葉は長楕円形で縁に尖った部分があります。

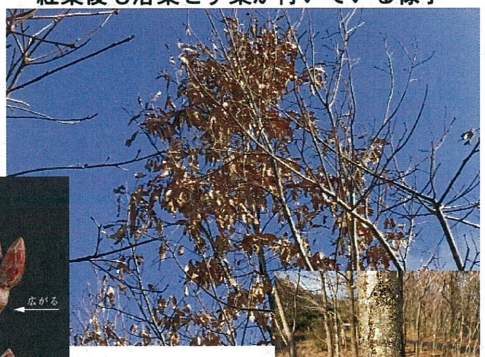
花は４～５月、若葉が広がる時に咲き、秋には、実（ドングリ）が熟します。樹皮は灰色で縦に裂け目ができます。

落葉樹ですが、クヌギと同じように秋に葉が枯れた時点では葉柄の付け根に離層が形成されないため葉が落ちず、いつまでも茶色の樹冠を見せ、春に新葉が展開する頃に枯れた葉の基部の組織で離層が形成され落葉します。

クヌギ同様、幹の一部から樹液がしみ出て、カブトムシやクワガタなどの昆虫が集まります。材は、木炭の原料やシイタケの原木に利用されます。

この時期、先端で八の字に広がった光沢のある冬芽を見つけることができます。

紅葉後も落葉せず葉が付いている様子



冬芽

樹皮

４．ヤマザクラ（バラ科）

バラ科の落葉高木で、日本に１０種あるサクラ属の野生種の中でも代表的な種です。

サクラの仲間では寿命が長く、樹高３０ｍを超える大木もあり、樹形は箒（ほうき）状でケヤキに似ています。

葉芽と花が同時に開くので、葉が出る前に花が咲くソメイヨシノと区別でき、短期間に開花時期が集中するソメイヨシノに比べ、じっくりと花見をすることができます。

樹皮は暗褐色または暗灰色で美しく家具の材料として使われ、クラフトの材料としても様々な作品に利用しています。

冬芽は芽鱗の先端が反り返り、やや外側に開き細長く尖っていて、枝の皮目が大きいのが特徴です。

冬芽　　樹皮

５．エノキ（ニレ科）

ニレ科の落葉高木で、樹高は 20m 以上、幹の直径 1m 以上にもなり、枝が多く枝ぶりは曲がりくねっていて、根元で数本に別れていることもあります。

樹皮は灰黒褐色で表面は砂のようにざらついており、葉は互生し長さ 4～9cm の卵形または長楕円形で、先は尾状に伸びています。

葉の質は厚く、縁は鋸歯状であるが、先端まで葉脈が発達しておらず丸みを帯びています。

花には、雄花、雌花があり、葉と同時期（４月頃）に葉の根元に小さな花を咲かせます。花の後ろに直径 5～6mm の球形の果実をつけ熟すと橙褐色になり味は甘く食べられ、またオオムラサキなど多くの昆虫の食樹にもなっています。

社寺の境内や公園、山地で多く見られます。

エノキの漢字「榎」は、夏に日陰を作る樹を意味すると言われています。

材は、古くから鍬などの農機具の柄に使われています。

冬芽はこの時期、三角形の帽子をかぶっているように見えます。

「びわこ地球市民の森」では、里の森ゾーンからふれあいゾーンへ渡る陸橋手前の大木２本をはじめ、多くの木が生息しています。

枝分かれの様子

里の森ゾーンの２本の大木

冬芽　　樹皮

６．ムクノキ（ニレ科）

ニレ科の落葉高木で生長が比較的早く大木になるため、日本では国や地方公共団体の天然記念物に指定されている巨木があります。

山地から低地の森林に生息し、特に人家周辺の神社などによく見かけます。

樹高は 20m 以上、幹の直径は 1m 以上にもなります。

樹皮は淡灰褐色で表面は平滑ですが、樹齢に伴って筋や割れ目が生じ、老木では樹皮が剥がれてきます。

葉は互生で、長さ 4～10cm の卵形または狭卵形、縁は先端まで鋸歯状で、また葉の質は薄く、表面は細かい剛毛が生え、紙ヤスリのようにざらついています。

花期は 4～5 月頃淡緑色の小さな花を咲かせます。

花の後に直径 7～12mm の球形で緑色の果実をつけます。

熟すと黒紫色になり、味は甘く美味で、ムクドリなどが食べに集まります。

冬芽は、紡錘形で灰色の短い毛が生えた芽鱗に包まれています。

緑色の果実

冬芽　　樹皮